

バイクやマリネ製品などで知られるヤマハ発動機の子会社で、半導体の後工程向け製造装置を生産するヤマハロボティクス（東京都）。2025年7月、ヤマハ発動機傘下の新川やアピックヤマダなど4社が統合して誕生した。半導体チップを基板上に固定する「ボンディング」や、樹脂で覆う「モールディング」を行う装置では世界トップクラスのシェアを誇っており、ワイヤボンダのメイン工場があるタイの拠点を中心に生産を行っている。アジアを中心とした海外戦略について、大岡文彦（おおおか・ふみひこ）アセンブリソリューション事業部長＝写真＝に話を聞いた。



—ヤマハ発動機グループにおける半導体事業の位置付けは。
産業用ロボット事業などを扱うヤマハ発動機のロボティクス部門とは別に、当社は半導体後工程の製造装置を中心としたビジネスを展開している。この部門の売り上げは現在、グループ全体で5%程度だが、今後成長が見込まれるセグメントとして位置付けている。グループ内の関連会社が統合したことで、顧客にワンストップで商品をお届ける体制を整えることができた。

—強みとする製品は。
「SHINKAWA Series」で展開するボンディング工程で使われるダイボンダ、ワイヤボンダ、フリップチップボンダや、「APIC YAMADA Series」のモールディング工程の装置が世界的にも高いシェアを持っている。

—海外展開の現状は。
12年、タイ中部パトゥムタニ県のナワナコン工業団地内に建設した工場が、最大の生産拠点となっている。ベトナム・ホーチミンにも半導体製造装置向けソフトウェアの開発拠点を設けており、25年には従来と比べ約2.5倍の面積がある新事務所で業務を開始した。

—タイ、ベトナムに進出した目的は。
タイは輸出用の梱包（こんぼう）材や段ボールならびに輸送費が日本に比べ安価なほか、作業者の人件費も日本と比べると数分の一ぐらいで、コストが安い。また、自動車関連部品のサプライヤーも多く、その近くで製造装置の組み立てを行うのが効率が良いという事情がある。ベトナムは、日本では採用が難しい優秀なエンジニアを比較的安い人件費で集めることができる利点がある。

—今後の半導体需要をどうみるか。
現在、装置の納入先は約半数を中国が占めているが、生成人工知能（AI）向けの先端半導体需要の高まりで、韓国や台湾の比率が増えてきている。米国や欧州、日本でも、半導体の需要が一般消費者が買う製品から、安全保障上のインフラとして国家が投資をするものになってきているので、今後も成長が期待できる。

—今後の海外戦略については。

タイの拠点では、生産能力を拡充するため、現在稼働している工場の敷地に同じ規模の新棟を建設したいと考えている。また、インドが「第2の中国」として半導体の投資を積極的に始めているので、5～10年後には大きな市場になることが見込まれる。今年7月にサービス拠点を開設し、需要を取り込んでいきたいと考えている。（聞き手＝経済部・城間知碩）